

予約の確認メールを、もう一度開く。一般営業終了後。水慣れ専用の個人レッスン。ほかの利用者はいないと分かっているけど、画面を閉じる勇気がなかなか出なかった。

泳げるようになれば、少しは自信を持てるかもしれない。そんな理由で申し込んだ個人レッスンの初日。僕は閉館後のプールの入口で、照明を映す水面を見つめていた。

(やっぱりやめようかな……。でも、ここまで来たし……)

問診票には、カントボーイであることも記入してある。戸籍上は男性でも、下半身のつくりは女性と同じだ。着替えや接触を伴う指導で困らせないために書いたものの、担当者へどこまで伝わっているのかは分からなかった。

「今日から担当する大越修平です。佑真くん、よろしく」

声をかけられて振り向くと、背の高い男が笑っていた。受付で見た講師紹介の写真よりも体つきがよく、黒い競泳水着から伸びる肩や腕には、はっきりと筋肉がついている。

「泳ぎの経験は？」

「ありません。水も、全然ダメで……」

「大丈夫。最初は俺の動きについてくるだけでいいよ」

大越さんは黒い競泳水着のまま先に水へ入り、浅い場所から僕へ手を差し出した。僕は長袖のラッシュガードと紺色のスイムショーツを着て、その手に掴まりながら階段を一段ずつ下りた。

「今日は泳がない。顔をつけて、息を吐けたら十分」

壁の縁を両手で掴み、腰まで水へ入る。大越さんは僕の正面に立ち、四つ数える間だけ水中で息を吐き、顔を上げて吸うやり方を見せた。

「吸って。ゆっくり吐く。一、二、三、四」

頷いて顔を近づけたのに、鼻先が水へ触れた瞬間、息を止めてしまった。慌てて顔を上げる。二度目も同じだった。三度目は頬まで沈められたものの、泡をひとつ出ただけで壁へ縋りついた。

「す、すみません」

「謝らなくていい。今、少し吐けた」

できなかったことではなく、泡が出ただけを拾われた。大越さんは声を荒らげず、僕の呼吸が落ち着くまで待ってから、もう一度四拍を数えた。

何回目かで、ようやく四つ数える間、水中へ顔をつけられた。顔を上げると同時に大きく息を吸う。大越さんの手が背中へ添えられた。

「次は伏し浮き。壁を蹴らなくていい。俺が胸と腰を支える」

「足が離れるのは、まだ怖くて……」

「怖くなったら足を戻せばいい。沈む前に俺が持つ」

短く言い切る声に押され、壁を掴んだまま片脚を浮かせた。もう片方の足まで床から離れた途端、つま先が底を探して暴れる。

沈むより早く、胸と腰を二本の腕で支えられた。水面へ横たわった体が、大越さんの腕の上で止まる。

「沈んでない。顔を上げないで、息を吐いて」

四拍の声だけを聞きながら、細く息を吐いた。泡が頬を撫でて上がっていく。足はまだ震えていたけれど、さっきのように底を探さずにいられた。

「そう。それでいい」

初対面の相手に短く褒められたただけなのに、固くなっていた肩から少しだけ力が抜けた。

次は、大越さんの手のひらへビート板を重ね、浅い場所をほんの数メートル進んだ。顔を水へ戻すた

びに怖くなる。それでも四拍を数える低い声が途切れない限り、どうにか足を動かせた。

「最後は背浮き。後頭部と腰を支える」

仰向けにされると、天井の照明が揺れる水面の向こうへ滲んだ。耳へ水が入っただけで不安になり、大越さんの肩へ反射的にしがみつく。

「すみません。無理かもしれません」

「俺を掴んだままでいい。膝を伸ばして」

背中と腰を支える手は揺れなかった。僕は彼の肩を掴んだまま、少しずつ脚を伸ばした。力を抜くほど体が浮く。頭では分かっていたことを、初めて体で理解した。

「今、浮けてる」

顔を向けると、すぐそばで大越さんと目が合った。

自己紹介では柔らかく笑っていたのに、指導中は僕の呼吸から一度も目を逸らさない。

「大越さんが支えてくれているからです」

「それでも、最初より俺に体を預けられてる」

褒められると安心した。もっと言われたとおりにできるようになりたくて、僕は次の指示を待った。

大越さんは僕を浅い段へ立たせたが、腰へ添えた手をすぐには離さなかった。

「水そのものより、体が固まることのほうが問題だね。肩も呼吸も、怖いと思った瞬間に止まる」

「どうしたら直りますか」

「触れた場所から力を抜く練習をする。泳がなくていい」

泳げるようになりたくて、わざわざ個人レッスンを選んだ。初日から水へ顔をつけられたのも、大越さんが支えてくれたからだ。

（大越さんの言うとおりにすれば、次はひとりでも浮けるかもしれない……）

そう思い、僕は頷いた。

「まず肩。息を吐いて」

背後から両肩を掴まれ、親指で首のつけ根を押された。四拍の合図に合わせて息を吐くと、強張っていた肩が少しずつ下がる。

「次は背中」

肩甲骨の間を手のひらが下りていく。背中の中の中央から腰まで撫でられるたび、どこへ力を入れていたのかが自分でも分かった。

「ここが固いと、下半身が沈む」

腰の両側を包まれ、姿勢をまっすぐに戻される。

逃げるように腹へ入った力まで、すぐに見抜かれた。

「まだお腹に力が入ってる」

腰にあった片手が、ラッシュガード越しに腹へ回る。ゆっくり押され、僕は反射的に息を止めた。

「ほら、また止めた」

「でも、そんなところまで触るんですか」

「呼吸が止まる場所を確かめてる。嫌がるより先に、体が固まるから」

もっともらしい説明に何も返せなくなる。深く息を吐くと、腹へ添えられた手が呼吸に合わせて上下した。

「力を抜いて。俺に預けて」

背後から支えられ、背中が大越さんの胸へ触れる。水着越しに伝わる体温が近すぎると思うほど、また

肩へ力が入った。

「初めてなのに、もう俺の声だけで息を吐ける」

「レッスン、ですから」

「そう。だから今は、何も考えなくていい」

さっき問診票へ書いたことを思い出す。大越さんは体の事情まで読んでいるのだろうか。不安になって、胸の前で指を握った。

「あの、僕の体のことも、聞いていますか」

「問診票は読んだ。指導中に配慮が必要なことも分かっている」

そこで答えを切り、大越さんは水面に映る僕の顔を見た。

「でも、今見ているのは書類じゃない。佑真くんの呼吸と、どこで怖がるかだよ」

淡々とした言い方なのに、腰へ回った腕だけがさつきより強くなる。大越さんは、僕が不安になるたび自分へ寄ることに、もう気づいているようだった。

「水面を見て。力が入ったら、俺が戻す」

首筋へ顔が近づき、僕は肩を竦めた。

「そこは、泳ぎに関係ないんじゃない……」

「触れる前から固くなった」

首のつけ根を押され、肩を下げられる。浅い段の上で一步退くと、踵が壁に触れた。そこで手首を取られ、体を回される。腰まで水に浸かったまま、プール内の壁へ背中を押し当てられ、大越さんの腕が顔の横につかれた。

「また息が止まってる」

「でも……」

「四つ数える。俺だけ見て」